

10

process in
architecture exhibition

—— これまでの展覧会を振り返りながら、公募で募られた出展者の一世代上の建築家と建築史家により、U-35（以下、本展）を通じたこれからの建築展のあり方と、U-35 の存在を考察する。



約 10 年前、U-30 として開催を始めた本展は、世界の第一線で活躍する巨匠建築家と、出展者の一世代上の建築家と議論し、あらたな建築の価値を批評し共有するために召集された。巨匠建築家には伊東豊雄。そして一世代上の建築家として、全国の地方区分で影響力を持ちはじめ新たな活動をされていた建築家・史家である。東より、北海道の五十嵐淳をはじめ、東北の五十嵐太郎、関東の藤本壮介、関西の平沼孝啓、そして中国地方の三分一博志や、九州地方の塩塚隆生など、中部と四国を除いた、日本の 6 地方から集まった。開催初年度には、三分一、塩塚など 1960 年代生まれの建築家も登壇し、開催を重ねるごとに 1970 年代生まれの建築家を中心となる。3 年後の 2012 年の開催より、この 8 人の建築家（五十嵐淳、石上純也、谷尻誠、平田晃久、平沼孝啓、藤本壮介、2013 年より、芦澤竜一、吉村靖孝）と 2 人の建築史家（五十嵐太郎、倉方俊輔）による開催を重ねることとなる。そもそもこの展覧会を起案した平沼が「一世代上」と称した意図は、出展の約 10 年後に過去の出展者の年齢が一世代上がり、世代下の出展者である新時代を考察するような仕組みとなるよう試みたのだが、この 10 名が集まった時期に、藤本が「この建築展は、我らの世代で見守り続け、我らの世代で建築のあり方を変える」という発言から、本展を見守り続けるメンバーが位置づけられていった。そして同時期に、五十嵐太郎の発案で「建築家の登竜門となるような公募型の展覧会」を目指すようになる。

ここで振り返ると、開催初年度に出展した若手建築家と出会うのは開催前年度の 2009 年。長きにわたり、大学で教鞭を執る建築家たちによる候補者の情報を得て、独立を果たしたばかりであった全国の若手建築家のアトリエ、もしくは自宅に出向き、27 組の中から大西麻貴や増田大坪、米澤隆等を代表とする出展者 7 組を選出した。その翌年の選出はこの前年の出展者の約半数を指名で残しながら、自薦による公募を開始するものの、他薦による出展候補者の選考も併用する。はじめて開始した公募による選考は、本開催のオーガナイザーを務める平沼が担当し、応募少数であったことから、書類審査による一次選考と、面接による二次選考による二段階審査方式であった。また海外からの応募もあったことから 2011 年の出展を果たした、デンマーク在住の応募者、加藤+ヴィクトリアの面接は、平沼の欧州出張中にフィンランドで実施された。また、他薦によるものは、塚本由晴による推薦を得て出展した金野千恵や、西沢大良による海法圭等がいる。つまり 1 年目は完全指名、2 年目の 2011 年からは、前年度出展者からの指名と公募による自薦、プロフェッサー・アーキテクトによる他薦を併用していた。そして、現在の完全公募によるプログラムを実施したのは、開催 5 年目の 2014 年である。完全公募による審査をはじめた初代・審査委員長を務めた石上

が、自らの年齢に近づけ対等な議論が交わせるようにと、展覧会の主題であった U-30 を、U-35 として出展者の年齢を 5 歳上げた時期であり、それから今年の開催で 6 年が経つ。また、この主題の変更に合わせてもう一つ議論されていたアワードの設定（GOLD MEDAL）は、完全公募による選考と出展者の年齢が 35 歳以下となった翌年の開催である 2015 年。公募開催第 2 回目の審査委員長を務めた藤本が、はじめてのゴールドメダル授与設定に対し、「受賞該当者なし」と評した結果は記憶に新しい。これが大きく景気付けられ、翌年には伊東豊雄自らが選出することによる「伊東賞」が、隔年で設定するアワードとして追加され、それぞれの副賞に翌年の出展者としてシード権を与えられるようになる。振り返れば、タイトルを変えてしまうほどの出展年齢もそうだが、プログラムが徐々にコンポジットし変化し続けているのが、本展のあり方ようだ。そして本展は 2019 年の開催で 10 度目を迎える。

この出展者の一世代上の建築家・史家たちが時代と共に位置づけてきたシンポジウムのメンバー 10 名が一同に揃った昨年の開催後に場を設け、開催 10 年目を迎える今後の U-35 のプログラムから存在のあり方を議論すると共に、ファインアートの美術展のように展覧会自体が発表の主体とならない、発展途上の分野である建築展のあり方を模索する会議を「10 会議」と名づけ、昨年度より第 1 回目の開催をはじめ、昨年の審査委員長を務めた五十嵐太郎と、2018 年開催の審査委員長を務めた平田、そして来年の審査委員長を務めることになった倉方を中心に、第 2 回目の「10 会議」を開催した。



——— それでは、昨年に引き続き、「10 会議」をはじめさせていただきます。昨年、審査委員長を務めていただいた五十嵐太郎様と、2018 年開催の審査委員長を務めていただいた平田様、そして来年の審査委員長を務めていただく倉方様を中心に、議論を展開していただければと思います。本日は長時間にわたり大変お疲れさまでございました。9 年目の U35 2018 記念シンポジウムを先ほど、終了させていただきました。まずは今年の出展者を振り返り、印象をお聞かせください。今年の出展者の選出および GOLD MEDAL の審査委員長を務められた、平田様 よりお願い致します。

平田：全般的にももの凄くハイレベルな戦いで、楽しんで展覧会会場も先ほどのシンポジウムのプレゼンテーションも見ることができました。ディスカッションも結構、楽しかったですね。結果として中川さんが金賞となれましたが、藤本さんが中川さんを推薦していたように、中川さんの作品はクオリティに問題がなく分かりやすい。以前僕は、ある賞の審査で彼女の最初の作品、「桃山ハウス」を見に行く機会があって、その時に衝撃を受けたのですが、ある意味でその感じがもはや、一つのスタンダードとなったような安定感を覚えました。だからそういう意味では、驚いたかというところほど驚いてはいない。だから逆の意味では三井くんは得体が知れないね。

全体：（大笑）

平田：三井さんと同じ東京大学の先輩後輩の関係から京谷さんの作品は、今回見た物としては、どうだったか、未だに僕には分からないかな。中川さんと同じ横浜国立大学出身者から富永さんや 403 は、もっとバラバラな物から浮かび上がる秩序を備えている印象を受けました。もう少しそういう部分が強く示されてくるとよいように感じました。高杉さん + ヨハネスさんの作品は、とてもエレガントな何かを纏っていて、すごく良いワインのような感じがするものを持っているような、クオリティの高さが際立ちました。また服部さん達は、すごいクオリティが高いんだけど、割と性急に建築になっているような印象を受けた。それでもこの年齢で、ここまでのクオリティのモノを造っているという実力には、敬意を表するし、こうやって出展者一人一人を挙げていくと、素晴らしい人々だったなという感想です。

平沼：中川さん以外で悩まれた金賞候補者はおられましたか？

平田：平沼さんも会場で言っていたように、ヨハネスさん達ですね。圧倒的な美しさと造形力が存在していました。そして富永さんが、リサーチ以降の具体的な取り組みを、もっと明快に説明して

くれたら、期待も込めて富永さんにあげる、みたいなことも無いわけでもなかったんです。僕が気になったのが、彼女の描いていた地図みたいなネットワーク図。ああいう考え方で建築を考える人は今までにいなかったように思ったのですよ。でもそれが最終的な結び付きとして何なのか、今ひとつ理解できないものでした。分散したいろんなものが結びついたときに、快感を覚えるというのは理解できるんだけど、あのリノベーションによってそのダイナミックなもの、本当にあそこ空間に引き寄せられているのかはちょっと見えてこなくて、でもそういうことが本当にできていたら面白いと思いました。

平沼：403 がやっていたように、僕も最近興味があって、通常の建築では見えてこない「材の取り付け方」を示すという手法。例えば彼らの説明にあったように、天井を吊るボルトの長さまで恐らく設計して、ナットで抑える山まで可視化し、建築の概念と建築の組み立て方を、そのまま空間で体験させていくという手法をどう感じましたか？

平田：あのつくり方は巧みだと思し面白いと思うけれど、「構想」そのものへ結び付きを発見できなかったのです。403 が浜松でやっているということの意味、浜松でしか生まれえないもの、というのが、もう少し構想にあつたら良かったように思います。

石上：地域性を前に出した街のことを言っている割には、建築でやっていることが、街っぽくないですね。街に混在した状況を記述まで示していなかったように感じています。

平田：うんうん。「他焦点なものをひとつに引きつけ、全体でバラつく点がこれだけある」というように、単体としての建築を超える視野を、導入しようとしているはずですね。でも作品からは、その「構想」があまりにも見えなくて分からなかったから、評価のしようがなかったというのが適切な言葉かもしれません。

平沼：竣工写真を示さなかったのは、中川さんだけでしたでしょうか。そういう意味では彼らが目指す構想の焦点が、明確にリアルな模型で示され、淡々と説明をされていましたね。

平田：そうですね。中川さんの発表は解像度が高く、モノごとの階層構造がはっきりと示され、それぞれの場所に入り込んでいたじゃないですか。だから説明が、非常にクリアに聞こえましたね。でもちょっとね、憎たらしい（笑）。

一同：（大笑）うんうん。

平田：でも優れていると判断せざるを得ない状況になっていましたね。

五十嵐太郎：今年の出展者選出から、新しい推薦制度が入ったことで、充実してきたと思います。そしてこのクオリティをずっと維持するのも大変だなあと思ながら（笑）、彼らの提案作品の発表を聞いていました。

平田：そうなんです（笑）。 推薦枠を設けたことで、公募枠から応募された方で落選した人の中にも、本当にクオリティが高い作品がいっぱいありました。

五十嵐太郎：きっとそうですね。このクオリティを出す人たちが7組、揃うということは、他薦・自薦にせよ、応募してくる人たちのレベルが一段階上がりましたね。そして今後は、今年の出展者であったベルギーからの2組のように、海外で活動をする日本人を含めたユニットを知る機会にもなりそうだし、もしかすると海外勢の応募も増えてくるのかもしれませんが。そして今日のように出展された建築の印象もそうですが、僕にとっては、高杉さん + ヨハネスさんが、これまで見たことがないタイプのプレゼンテーションですよ。

平沼：恐らく日本語のできないヨハネスさんが、朗読かフィルムのように、日本語で発表するという、独特な感じが新鮮でしたね。





一同：(笑)

五十嵐太郎：そう、昔の表現で独特のズラシ感もある。あと普通は展示を、作品を再現するという形で、模型なり写真なりで一生懸命やるけれども、展示デザインの作品と、U-35の彼らのインスタレーションは別物でもあるし、またその延長にできた自立した作品のように見えて、プレゼンテーションではかなりのインパクトがありました。ただ展示だけをみると来館者は分かりづらいつ思いましたが、プレゼンを聞いてから展示を思い出すと、これまでにないタイプの表現だったことが非常に印象的でした。そして金賞の結果からは、きっと結局僕も、中川さんに入れてしまうんだろうと思いつながら聞いていました。既にあるものの中で、一番ある種の確信をもって押せるのでしょうね。あと歴史研の二人については、先ほども述べたようにこじらせている感じがありましたね。

一同：(笑)

五十嵐太郎：京谷さんも三井さんも方向性は違うけれど、そのこじらせ方が面白いと思いつながら聞いていました。また、富永さんの作品は新しい世代の人だなあと感じる。3.11の後に、彼女は牡鹿半島にフィールドワークに行き、あとヨコミヅマコト研で助教をしながら、被災地のいろんな漁村集落の人の話を聞いてものすごい思いを受け止めたけど、結局被災地では直接フィードバックしたデザインができなかった。彼女の中でわかまじりがあったから、例えば真鶴で、そのデザインのリベンジをしている。真鶴でいろんなことを調べて被災地でできなかったことをあそこで何ができるのかを試してみたという意味では、ポスト3.11そのものが彼女ですよ。しかし所謂、従来の建築的な強度は取れてなくて、拡張した建築かもしれないんだけど、確信をもって推すというのは難

しいかなと思いつながら見ていました。そして去年は、今年に比べると高水準の争いではなかったの、誰に賞を渡すのか正直悩みました。流れの中で、三井さんが最後に物議を醸した「俺は空間に興味ない、構造と装飾だ」って言い切ったことに、他の人と違う意思表示があると思ったので選んだという感じでした。今年の中川さんは、そういう意味では圧倒的な強さがあったかなと思います。

平田：三井さんは本当にいろんなことを聞いているようで全然聞いていない。結構心が強い人だから、面白いことをしていくのではないのかなと思う反面、今回の出展作はどうしたのだろう。少しこじらせ過ぎていますね(笑)。

一同：(笑)

平田：素直にやればいいのにな。昨年の金賞であることから当然だろうけど、アベレージでいうと彼が一番実力あるでしょう。論理的だからなんでも説明できてしまうと思いますが、良い意味であんまり入り込み過ぎないでやったほうが良いかなと思います。テナントビルで木造をやって、補助金なしで、結構前から割と戦略的に何も無いところによくわからないものが建つ、ということだけでもそれはそれで、凄くおもしろいという印象ですけどね。



—— 昨年、第 1 回目の「10 会議」が発足され、本展のあり方を議論させていただく場から、出展者の選出方法を他薦である推薦枠を追加し、1 他薦・推薦枠、2 自薦・公募枠、3 シード・指名枠との 3 枠といたしました。本年と来年の 10 名による選出者は、下記に記載しています。

【2018 年推薦】 審査委員長：平田晃久

0 1. 五十嵐太郎 ●百枝優 | 百枝優建築設計事務所

0 2. 倉方俊輔 ●長谷川匠 | アトリエ長谷川匠

0 3. 芦澤竜一 ●辻琢磨 | 403architecture

0 4. 五十嵐淳 ●瀬川翠 | Studio Tokyo West

0 5. 石上純也 ●富永美保 | トミトアーキテクチャ

0 6. 谷尻誠 ●大塚亮 | circle

0 7. 平田晃久 ○2018 年 審査委員長のため不選出

0 8. 平沼孝啓 ●片岡慎策 | 片岡構造設計事務所

0 9. 藤本壮介 ●中川エリカ | 中川エリカ建築設計事務所

1 0. 吉村靖孝 ●秋吉浩気 | VUILD

【2019 年推薦】 審査委員長：倉方俊輔

●柿木佑介 + 廣岡周平 | PERSIMMON HILLS architects

○2019 年 審査委員長のため不選出

●佐藤研吾 | In-Field Studio

●佐々木翔 | INTERMEDIA

●津川恵理 | ALTEMY

●中尾彰宏 + 齋藤慶和 | STUDIO MOVE

●山田紗子 | 山田紗子建築設計事務所

●岩瀬諒子 | 岩瀬諒子設計事務所

●百枝優 | 百枝優建築設計事務所

●秋吉浩気 | VUILD

上記の他薦・推薦枠より 3-4 組、自薦・公募枠により 3-4 組＝計 7 組

●推薦枠・公募枠による選出数は、当年の審査委員長・選出数による。



—— 本年と来年の審査委員長の平田様、倉方様より、来年開催の議論をはじめて頂けませんか。

平田：以前は出展者ではなく、審査員が一言ずつ軌道修正しながら喋っていかないと場もたないというか、出展者の話が長いと感じていましたが、今回はちょうどよく感じました。発表・講評の形式はよかったのかもしれませんが、ディスカッションの時間がもう少しあってもいいように思いました。もしかしたら、審査員のプレゼンテーションも来年は無くして議論した方が、良いのかなと思います。

芦澤：出展者の皆さんが言い足りない感じもありましたね。

倉方：同感です。議論は大いに盛り上がった方が良いと思うので、ディスカッションの時間を長くすることに賛成です。

平沼：今回もそうでしたが、毎年開催するシンポジウムに、どうして満席になる程の来場者の方が駆けつけるかという、やっぱりこの世代が一同に集まるからだと聞きます。そして近作じゃなくても、近況を聞けることが醍醐味になっている。残念なことに、出展者が毎晩話すりレー形式のギャラリー・トークは個人差があるものの、30 席の会場に実際は、2-3 名という日もあって、自分自身で来場者へ声を掛けない限り、誰も来ない状況は否めない。それが今の時代の若手の現実です。でも来年一度そのような形式で、ゲストは壇上に上がって挨拶くらいで少し短縮してみましようか。

平田：なるほどですね。うん。一度、議論に重きを置いてみましょう。

芦澤：出展者の選出は、推薦枠から必ず 2、3 組出すことにしているというのはどうなのでしょう。全体で純粋に審査して良いものを選んだ方がいい気がします。

平田：でも推薦枠はやっぱりクオリティ高いですよ。

一同：(笑)

平田：僕も当然、全体で選出をした結果なんです。

倉方：確かに一理あって、推薦枠から 5 組が入ったりすると公募の意味が薄くなってしまう。確かに推薦枠は上限が 3 組と来年は決めておきます。

五十嵐太郎：しかし、今回の海外勢の 2 組は、推薦枠ではなくて公募枠でしたね。自薦の人たちも結構クオリティが高くなっています。

倉方：確かに。公募枠の最大は、全てであっても良いですね。公募枠の選出に制限はないことにしましょう。

——— そして本年より、シンポジウムの発表形式に変更を致しました。来年に向けて、このプログラム変更の効果を教えてください。こちらは昨年の審査委員長を務められた五十嵐太郎様よりお話しください。

平沼：今日のような 1 組ごとの対談式は人気がありますね。

倉方：今日、初めて会場から見ていたけれど、自然な流れですごく分かりやすかった。



五十嵐淳：今年は休憩をはさみ、前半に 4 組、後半 3 組と発表を分けたのですが、来年は、前半の僕たちの時間を詰めれば、前半に発表と講評、後半に議論がされるということがいいですね。

倉方：そうですね。今日のように分かれてしまうと、前半と後半でグルーピングしたくなります。発表と質疑応答までをやって、後半に徹底的な議論を交えたディスカッションするというのが、明快でしょうね。

五十嵐淳：うん。いいじゃないですか。それだと一応、自分で言いたい人を選べますしね。今日のように、時間の配分から指名されるのは、ドキドキして（笑）。

一同：（爆笑）

芦澤：彼らが発言する時間を多く確保してあげるのには良いと思っていますが、上の世代へも批評したいんじゃないかな、彼らは。

倉方：ただ、そこまでしていると時間が明らかになくなりそうです。

平田：1 日かかってしまう。

一同：（大笑）

倉方：確かに 9 年前に開催をはじめた時には、そういう趣旨もありました。13 時から 20 時くらいまで、7 時間くらいやってたんじゃないでしょうか（笑）。でも近年では、アワードを設定してから、集中した議論をしっかりしていこうという傾向にあります。議論優先ということに僕は賛成です。

谷尻：もう少し反論もしたいだろうと思う部分もあります。時間に制限があるのもしょうがない。でも、言われっぱなしで結局言いたいことが言えなかったとか、ひっくりかえせるようなチャンスを与えてあげることは、彼らにはないのかな。

倉方：7 組で議論すると、流れが変わっちゃうことがあるので、後で思い出したときに言うのが難しい。2 つを分けると、また議論の流れが近づいたときに、反論や異論を言うことがもう少しやり

やすくなるかもしれない。ぜひ、そうしてあげたいですね。

——— また、本展のような建築展を継続的に取り組む意図のひとつとして、今後の建築展の在り方を実験的に取り組んでいきたいと思っています。今年、50万人を超える程に「建築の日本展」に関わられた倉方様より、どのように建築展の在り方を模索していけば良いのかお話しただけでないでしょうか。

倉方：さっきの五十嵐太郎さんのご意見が僕ももっともだなと思ったのは、展覧会としてのプレゼンテーションは言葉のプレゼンテーションとも違うし、モノそのものとも違う表現で、すごく展覧会の可能性を切り開いていて面白い。でも一方で、一般の人が何もわからず来た時に何か得るものがあるかというとますます遠くなっている感じは無きにしも非ずで、このバランスが難しいですよ。可能性を追求していくと一般性からある程度離れて行っちゃう部分があるので、そこはある意味、建築の日本展とは真逆ですよ。『建築の日本』展はとにかく1個単体のもので力があるようなものを展示して、キュレーションでうまく深みを出そうとしていました。けどどね、U35はこれでいいんじゃないかなと思います。

五十嵐太郎：うん、そうですね。今回の出展者の中で海外勢2組は、一切キャプションなかったですよ。日本の人たちはたくさんの説明が置いてあるし、キャプションもいっぱいありました。でも、キャプションをなくして説明をしない方が、展示として美しいのもよくわかるんですよ、あの展示に関して言うと。ただ一般の人が来た場合はかなり辛いというか、わからない。例えばキャプションを入れると、あの展示が崩れるのもわかるので、ハンドアウトで、A4版1枚でもいいんですが、そこに第三者が少し説明を書いたものを配布する。『建築の日本』展でもあったと思うのですが、各作品について簡単な説明をつけるといいと思います。展示に混ぜると、展示デザインにも影響してしまうから、別の方法で補完する。それで最低限わかるくらいのものになるのではないかと思います。比較的、建築のリテラシーが高い人は別にいらないと思います。できれば本人が書くよりは、第三者が解説する。建築家本人が書くとかえってわかりにくいケースも、人によってはできますから。

一同：(大笑)

倉方：今年の会場から、出展者自身が解説する映像をそれぞれのエリアで放映したのは、とても良かったと思います。各出展者が、どういう気持ちでつくっているのかという、客観的なテキストも

あると、五十嵐さんが仰ったように理解度が変わるかなと思います。

平沼：それ太郎さんが書いてあげてくださいよ。

五十嵐太郎：(笑) いやいや、倉方さんはみんなと話しているから、倉方さんの方がきっと書きやすいですね。

倉方：いや、出展者説明会の座談会で展示内容がある程度決まっています。その際、使えるように話してもらって、文字起こししたものを載せるのが一番いいのかもしれませんが。話し言葉だと建築家自身が話したとしても、そんなに難しいこと言う人はいないでしょうから。

平沼：その座談会内容は、倉方さんインタビューとして図録に記載されていますから、入場受付で購入案内をしてもらいましょう。

倉方：アハハ(笑)なるほど。もう何もかも、準備されていますね。

——— 最後になりましたが、引き続き今年の応募条件をこのまま、独立したU35(35歳以下)の設計を募ります。そしてこれから応募をしてくる若手へアドバイスをいただけないでしょうか。





谷尻：出展希望の方たちには、自分のことを振り返る良いチャンスになると思います。設計は、孤独な作業ですが、その自分の考えていることを「客観的にみる」とてもいい機会だと思います。それはむしろ僕らも一緒に、成長の場になります。ぜひ勇気を出して応募してほしいですね。

倉方：僕はものとしての完成度よりも、希望として、世界の捉え方や建築の考え方というか、そういう物の新しい部分が見たい。建築家は結局そういう自分の捉え方や考え方をずっとやり続けていくかどうかで、結果的にモノのクオリティもできてくると思います。そういうものを見たいので、自分のやっていることはヘンだと思う人が出してほしいと思います。

芦澤：U-35、35歳以下の建築展でしか表現できないことがあると思います。この世代に、ぶっ飛んだ建築を出してほしいなって思います。

五十嵐淳：貴重な展覧会だと思うんですね、だからこそ、この特殊なものに関係するっていうのは、将来、絶対にプラスとなると思います。皆さんに出会えるのを待っています。

平沼：ここにおられる僕らも当時はみんなそうだったように、独立したというよりは孤立した感覚です。だから悶々としている人たちが、まだまだ沢山いるはず。「俺はどうだろうか。」「どうしようか」「この計画で大丈夫かな」みたいなことで悩んでいるはず。でもこういう機会に出て、どんどん前のめりに、挑戦というよりも、交信のような確認にきてくれたらいいと思っています。あとは多分、この上の世代がフォローし、新たな価値を見出してくれると思います。

平田：谷尻さんも言われたように、建築の設計は孤独なところがあると思うんですね。自分が考えている基準と同じ基準で考える人なんて誰もいないから、議論なんてしても意味ないんじゃないとか、集まって考えるとは何事だ、と思っている人もいるかもしれない。例えば僕ら世代の人から頑張って出したのにボロクソ言われる、そんなところに出したくないよみたいな。あるいは少し足踏みして少し距離をとって、という人も結構いるのかしれません。それでも、そういう設計者の中に、なんか面白いことをしている人も恐らくいるはず。僕が言いたいのは、何かみんなで共有しているときに強くなる、建築の歴史というのはやっぱりみんなで共有しあうこと、それがないとやっぱりやっていけないと思うんです。我々が下の人のためにいいこと言えるような人間ではほとんどないですが、それでもお願いしたいのは、建築の歴史にひとつ投資をするというか、そうしたら自分にも何か戻ってくるのではないかなというような、そのくらいの気持ちで関わってもらいたいなと思っています。

吉村：U-35というか、この展覧会を本当に良いと思っています。数年前、確か五十嵐淳さんだったと思うんですが、プロポーションが悪かって壇上で言い続けたこと、それはすごいフェアだなと思ったんです。普通の講評会って、強者と弱者がはっきりしていて、そのことで結構、隠蔽されてしまうことがあると思うんですよ。それはコンペやプロポ、アワードの審査や結果もいろいろ。そしてプロポーションが悪いか、学生にあんまり言えない（笑）。言っても通じないというか。



だからそういうことがなく、言いたいことが全部言え、聞ける機会は、本当に大切だと思います。
ファンズワース邸のプロポーショナルが悪いって言ってましたよね。

一同：(笑)

吉村：素晴らしいことだと思うんですね。こういう会はなかなかないと思うから。

—— 皆さま終日にわたり、誠にありがとうございました。展覧会図録の編集については、次年度以降の議題とさせていただいて、終了とさせていただきます。本日は、展覧会会場での視察には始まり、4時間余りのシンポジウムの後、本日の会議の場にご参加下さり、貴重なご意見をいただけて感謝しています。本日の議論の内容は、急速、フランスに出張された藤本さんにも共有するためお送りし、本展の新たな展開を楽しみにしています。来年のシンポジウムは、2019年10月19日土曜日と決定しておりますので、皆さま、10年目の開催もどうかよろしく願いたします。本日は、誠にありがとうございました。



U-35 2018シンポジウム会場の様子



U-35 2018シンポジウム会場 上階・ナレッジサロンにて



U-35 2018シンポジウム会場の様子